

MOOMIN! ムーミン展

2015年 2月19日(木) - 3月15日(日) 会場: 企画展示室2



「ムーミン谷の冬」挿絵。1957年、タンペレ市立美術館・ムーミン谷博物館



「ムーミン谷の夏まつり」挿絵。1954年、タンペレ市立美術館・ムーミン谷博物館

ムーミンの作者、トーベ・ヤンソンは1914年、彫刻家の父と挿絵画家の母のもとに生まれ、自身も画家を志し、ヘルシンキの美術学校で学びました。ムーミンの原型はトーベが10代の頃に描かれたが、その後、トーベが挿絵の仕事を手がけていた雑誌『ガラム』誌上にキャラクターとして登場しました。トーベが創作したムーミン童話は1945年に出版された『小さなトロールと大きな洪水』を皮切りに、1970年までに全9作が作られ、現在でも世界中で読み続けられています。

ムーミン童話では、トーベが過ごした厳しく豊かなフィンランドの自然風土が重要なモチーフになっています。ムーミンをはじめとする魅力的な登場人物のすがたと共に、彼らが暮らすムーミン谷の世界の自然現象やそこに暮らす生きものたちが繊細に描かれ、物語に奥行きを与えているのです。本展覧会では、ムーミン童話にみられる自然をテーマに、童話の挿絵原画や習作、スケッチなど約200点を紹介します。モノクロームで描き出された、ムーミンの奥深い世界をお楽しみください。(鳴原)

© Moomin Characters™ Tampere Art Museum Moominvalley

エヴァンゲリオンと

日本刀展

2015年1月31日(土)~3月22日(日) 会場: 特別展示室

アニメーションと伝統工芸との奇跡のコラボレーション——この展覧会は、人気アニメ『エヴァンゲリオン新劇場版』に登場する「ロンギヌスの槍」「ビゼンオサフネ」「マゴロクソード」といった武器を、現代の刀匠たちが伝統の技で再現した現代デザインの日本刀を展示するものです。あわせて、日本刀の形状の変遷を、精緻な鍔、柄といった刀装具とともに紹介し、世界に誇る日本の工芸品の代表である日本刀の世界をご紹介します。もちろん『エヴァンゲリオン』の世界も会場に再現。エヴァンゲリオン初号機のフィギュアや、原画のパネルなどが展示されます。

古来、武器として美術品として、あるいは精神的な存在として大切にされてきた日本刀。この機会に、未来へ伝えるべき伝統の技と美を知っていただき、身近なアニメーションを通して、「ものづくり」の素晴らしさに触れていただければと思います。(長井)

愛媛県美術館コレクション紹介



《田舎の家族》

野間仁根 ふたつの 《田舎の家族》

ここに並べたふたつの作品。タッチは全く異なりますが、よく見れば描かれている構図やモチーフはほぼ同じ。両作品とも、本県今治市出身の洋画家・野間仁根(1901-79)が描いたもの。野間は、戦前戦後の二科会で活動し、明朗で自由奔放な画風を生涯貫いた愛媛を代表する洋画家の一人です。

左の作品は、昭和62年度に収蔵された《田舎の家族》(昭和26年作)という油彩画。対する右の作品は、昨年度新たに収蔵されたものですが、《田舎の家族》と寸法、構図、モチーフはほとんど同じ。ただし、画面にマス目(方眼)が引かれていること、そして使われている画材も鉛筆やパステルといったものなので、おそらくは《田舎の家族》の習作(原寸大の下絵)であろうと判断されます。いつしか離れ離れになっていた下絵と完成作が、何十年かぶりに再会を果たし、ともに当館で収蔵されることになるなんて、当の作品たちも、ましてや野間本人も想像だにできなかったでしょう。



《田舎の家族(習作)》

昨年5月から8月にかけての「平成25年度新収蔵品展」では、両作品を並べて展示しました。並べてみると一目瞭然なのですが、習作と完成作とは、画風に大きな違いがあります。習作のほうが、一般的にイメージされる「野間仁根らしさ」にはびつたりなのですが、完成作では、彼としては珍しく重めの暗いトーンで、絵具を塗ったのちに、輪郭線を細い釘のようなものでさらに引っ掻いているというなかなか実験的なもの。これが描かれた昭和20年代は、野間は戦時中の郷里への疎開を経て、再び上京し中絶していた二科会の再建に奔走していた時期です。疎開中、油彩はほとんど描いていなかったようなので、久しぶりに大画面の油彩を描く喜びと気合いからでしょうか、いろいろ構想した末に、最終的に彩色やタッチに大きな改変が加えられたのかもしれない。

新たな資料・作品が発見され、コレクションに加わることで、それまでであった所蔵品の価値・魅力がさらに増す——今回の経緯は、実に理想的な収集のあり方を示してくれたと思います。(長井)

愛媛県美術館

〒790-0007 愛媛県松山市堀之内
TEL 089-932-0010 FAX 089-932-0511
<http://www.ehime-art.jp>



愛媛県イメージアップキャラクター みやま熊



ウマのひとこと (編集後記)

今年度は、当館学芸員が企画から関わった展覧会を多く開催いたしました。展覧会は終了しましたが、それぞれ図録を作成しております。図書コーナーで図録はご覧いただけますので、末長く楽しんでいただければ幸いです。(石岡)

Canforo 49

Canforo カンフォロとは?

イタリア語で「くすのき」を意味します。愛媛県美術館の中庭に立つ3本の大きなくすのきにちなんでなづけられました。

執筆者
梶岡 秀一
長井 健
杉山 はるか
鶴原 悠
田代亜矢子
野口 理佳
石岡 ひとみ

安田鞞彦生誕130年、小倉遊亀生誕120年

「遊亀と鞞彦」展

一師からのたまもの・
受け継がれた美

12月13日(土)~1月25日(日)

※会期中作品の展示替えがあります。展示目録は愛媛県美術館HPをご覧ください。



重要文化財 安田鞞彦(黄瀬川陣) 東京国立近代美術館

日本美術院(院展)の第3代理事長をつとめた日本画家、小倉遊亀が逝去したのは平成12年(2000)。そんなに遠い昔ではありませんから、現代の人という印象があります。しかし享年105歳。生まれたのは明治28年(1895)。19世紀末です。

遊亀の絵の先生は、安田鞞彦です。明治期に岡倉天心の薫陶を受け、大正期以降は、横山大観率いる日本美術院で小林古徑や前田青邨等とともに活躍し、日本美術院の初代理事長をつとめた日本画の巨匠で、いかにも歴史上の偉人の感がありますが、明治17年(1884)の生まれですから、実は遊亀とは11歳しか離れていません。意外に歳の近い師弟だったのです。

遊亀が鞞彦に師事したのは大正9年(1920)、25歳のときですが、そのきっかけをつくったのは遊亀の母校、奈良女子高等師範学校の図画の教授だった横山常五郎と、歴史の教授だった水木要太郎でした。横山常五郎は、法隆寺金堂壁画に見るような美しい線を描けるのは、現代では鞞彦しかいないと思うことを遊亀に語ったと伝えられます。水木要太郎の家に、鞞彦が描いた聖徳太子像があることを教えてくれたのも横山常五郎でした。水木教授の歴史の授業に魅了され、古美術に興味を持つようになった遊亀は、水木家で鞞彦の絵を間近に鑑賞し、鞞彦を尊敬し、鞞彦のもとで絵を学びたいと考えるようになりました。

画家になりたくて自分なりに研鑽し、模索していた遊亀は、決意して鞞彦の門を叩いたとき、もし弟子にしてもらえなかったら絵を諦めるつもりでした。病中につき五分間の約束で面会した鞞彦は、遊亀から水木要太郎の名を聞いて喜び、話は弾んで二時間も及んだそうです。「絵の道には弟子も師匠もない。ただ先輩と後輩がある。何でも言える先輩になら、ならせて貰います」というのが、入門の許可の言葉でした。

鞞彦にとっても水木要太郎は恩人だったのです。明治40年(1907)、奈良へ留学した鞞彦は、法隆寺など古寺をめぐる、古代中世の美術を研究したのですが、その際、古寺への仲介役をつとめたのが水木要太郎だったようです。また、鞞彦が奈良で病の床に臥したときも、水木要太郎が世話をしてくれたようです。

病と闘いながら、古代の美へのあこがれを造形化しようとした鞞彦のこの時期の研鑽こそ、後年の彼の《黄瀬川陣》や《飛鳥の春の額田王》に代表される歴史画の名作を生み出してゆく基盤となったと見ることができます。

昨秋開催した特別展「村上上海賊の世界展」に触発され、10月にしまなみ海道をサイクリングしました(ほぼ完走!)。瀬戸内の穏やかな海面に島々が浮かぶ風景を、自転車ならではのゆったりとしたスピードで満喫、これまで多くの作家たちが作品に表現してきたのもうなずけました。(鳴原)



うぶやき



小倉遊亀(娘) 滋賀県立近代美術館

愛媛県美術館 開館記念 イベント 11月23日(日)



昨年11月23日に、美術館の開館記念イベントを開催しました。天候にも恵まれ、前庭では創作プログラムとして、県内大学生とアトリエ版画同好会の協力の下、「てづくりワークショップ」やチョークで地面に絵を描く「大地は大きな黒板だ！」を開催。子どもたちの自由で豊かな発想に大学生や大人たちもびっくり！小さな可愛らしい作品が次々と生まれ、笑顔溢れる温かい空間になりました。鑑賞プログラムのイベントも盛りだくさん。愛媛フルーツ協会と愛媛大学医学部室内合奏団による「エントランスミニコンサート」(友の会協賛事業)では、多くの来館者が足を止め、優しい癒しの音色に聴き入っていました。また、展示室では、「企画展対話型鑑賞」や「たんけんはっけんコレクション」を開催。じっくりと作品を鑑賞する中で参加者同士の対話もはずみ、楽しく心地いい時間になりました。開館記念イベントの締めくくりとして最後に開催した「学芸員によるフロアーレクチャー」では、所蔵品展の各展示を担当した学芸員が勢揃いし、それぞれの展示のみどころや、作品にこめられた意味を紐解く絵解きの楽しさを紹介しました。

今回も沢山のお客様に来ていただきありがとうございました。今後も、世代を超えて楽しんでもらえる文化発信の場となるように努力していきたいと思っております。(鴨原、野口)



学芸レ
ポート

所蔵品展

日本美術院と 近代日本画

12月19日(金)～3月8日(日)

- 企画展「遊亀と靱彦」展では、日本画の巨匠、安田靱彦と小倉遊亀の名作をご覧ください。二人はともに、岡倉天心の志を継ぐ日本美術院(院展)を拠点に活躍しました。明治31年(1898)に創立され、大正3年(1914)に再興された日本美術院は、戦後の昭和33年(1958)、横山大観の悲願によって財団法人となりました(平成23年からは公益財団法人)、その初代理事に就任したのが靱彦、そして第三代理事に就任したのが遊亀です。
- そこで、所蔵品展では「日本美術院と近代日本画」と題して、横山大観、菱田春草、小林古径、前田青邨、平山郁夫など日本美術院で活躍した画家たちの作品を中心に、近代日本画を特集しています。愛媛出身の大智勝観については、当館の所蔵品だけではなく、県内の個人で所蔵の名品も展示していますので、「遊亀と靱彦」展と併せて御覧いただけますようお願いいたします。(梶岡)



大智勝観(初葉十二社)

普及レポート

アトリエ教室 藍染め

美術館のアトリエでは、版画・染め・織り・写真・木工・・・と様々な創作活動を楽しんでいただけるスペースを提供しています。一般利用がメインですが、水曜と土曜日に【アトリエ教室】として、創作の工程やアトリエ利用の仕方をお伝えする枠を設けています。

最近人気なのが「藍染め」です。藍はジャパンプルーと言われるように日本人に馴染み深い色であるのか、通年を通して染めに来られる方が居られます。当館では、浸け染めで明るい藍色の「インド藍」、同じく浸け染めで天然染料と化学染料の混合物である「大和藍」ではウールを濃く染めることができます。また濃厚な「沈殿藍」では描くことも体験していただけます。絞りや模様を描いたオリジナルの藍染めを楽しませてみませんか？(田代)



南館の貸しギャラリーでは、年間通して様々な団体の作品が展示され、県民の文化交流の場になっています。オープンスペースのアトリエもあり、版画や織り、写真などの作品制作ができます。是非、のぞいてみてください。(野口)

カンフォロ Canforo No.49

愛媛県美術館ニュースNo.49 2015 発行日=平成27年1月15日 編集・発行=愛媛県美術館



愛媛県美術館

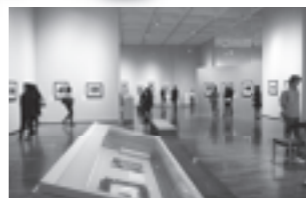
〒790-0007 愛媛県松山市堀之内
TEL 089-932-0010 FAX 089-932-0511
<http://www.ehime-art.jp/>



● 開館時間
9:40～18:00 (入室は17:30まで)
*企画展及び貸展については、入室時間が異なることがあります。各展覧会のページでお確かめください。
● 休館日 月曜日
(祝日、振替休日及び第1月曜日に当たる場合は開館し、その翌日が休館日)

東京富士美術館所蔵写真展

ロバート・キャパと 過ごす時間/ 光の風景へ



本展は企画展としては約12年ぶりの写真展として開催された、当館独自企画による展覧会でした。ハンガリー出身の報道写真家であるロバート・キャパ(1913-1954)を中心に取り上げながら、キャパと交流のあったアンドレ・ケルテスやアンリ・カルティエ・ブレッソンなどの多彩な写真家の作品や、同時企画として19世紀半ばに遡る情緒豊かな風景写真なども紹介し、全体として写真そのものの魅力をも堪能していただけたのではないのでしょうか。

キャパは、スペイン市民戦争で撮影されたいわゆる「崩れ落ちる兵士」で世界的に知られ、その後も第2次世界大戦におけるノルマンディー上陸作戦など、数々の重要な戦取材を果たした報道写真家です。また戦後、写真家集団「マグナム・フォト」を立ち上げ、その後の写真家の地位の向上にも貢献しました。

今回はこのような業績も取り上げながら、多くの人々から愛され、また多くの人々に愛情を注いだキャパの人間性に注目し、キャパの写真を順にたどりながらキャパ自身を身近に感じていただければと願い、企画しました。キャパは常に人に強い関心を抱き、戦時中でも戦闘中の写真だけではなく、休息する兵士たちや市街に暮らす人々など、人に寄り添った写真を多く残しています。また、親しかったヘミングウェイ、イングリッド・バーグマン、スタインベックなどの打ち解けたポートレートからも、キャパの人間としての魅力を窺い知ることができたのではと思います。(杉山)



ルース・オーキン [ロバート・キャパ、パリ] 1951年
© Collection Capa / Magnum Photos

四国へんろ展

四国へんろ展(9/6～10/13)では、岩屋寺での一遍の修行の場面を描いた、国宝《一遍聖絵》(清浄光寺蔵)を始め、高野山の名品ほか重要文化財《空也上人像》(49番礼所浄土寺)等国宝4件重要文化財14件、愛媛県指定文化財《弘法大師坐像》(42番礼所佛木寺)他、ふだん見ることのできない貴重な文化財の数々とともに、四国遍路及び札所の文化財の最新の調査成果を紹介しました。

展覧会にあわせて、さまざまなイベントを実施しました。まずオープニングイベントでは、高野山真言宗宗務総長添田隆昭氏の記念講演会「巡礼—その深き御心に導かれしもの」と、能管・野中久美子氏と琵琶・川村旭芳氏のユニット「伽羅」の演奏でスタートしました。講演会は、塩出貴美子氏(奈良大学教授)の「絵で見る弘法大師伝—長楽寺蔵(弘法大師行状曼荼羅)を中心に—」、白川密成氏(第57番礼所崇福寺住職)の「近所の仏教—生活の中にある智慧」、胡光氏(愛媛大学准教授)「四国霊場開創1200年と世界遺産への道—空海と弘法大師の足跡」の3本を開催しました。学芸員による講座「仏像を鑑賞しよう」では、展示室で仏像のみどころを解説し、フロアレクチャーとあわせて大好評でした。講座「文化財をまもろう」では、国宝級から身近な文化財まで、劣化要因などを考えながら、後世に伝えるための保存方法を探りました。10/4・5には、愛媛大学で平成26年度愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」公開講演会・シンポジウムが開催され、愛媛大学と愛媛県美術館とで共同調査した第52番礼所太山寺の文化財調査について、彫刻・書画・工芸品の調査成果を発表いたしました。本展は、地域の文化財を取り上げ、調査研究の成果を紹介した展覧会となりました。四国へんろ展は四国四県の各会場ごとに図録を作成しておりますので、ぜひ図録で再度ご覧いただければ幸いです。(石岡)

